

パウロの喜び (9)

2008. 3. 18 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

コリント人への手紙・第一 15章3節から8節

私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書に従って三日目によみがえられたこと、また、ケパに現われ、それから十二弟子に現われたことです。その後、キリストは五百人以上の兄弟たちに同時に現われました。その中の大多数の者は今なお生き残っていますが、すでに眠った者もいくらかいます。その後、キリストはヤコブに現われ、それから使徒たち全部に現われました。そして、最後に、月足らずで生まれた者と同様な私にも、現われてくださいました。

何年か前に、ある姉妹から、自分で作ったきれいなカードをもらったことがあります。表紙に何と書いてあったかと言いますと、『みことばの扉』。そして開けてみますと、中には次のようなみことばが書かれていました。「主は生きておられる」と。

ちょうどその頃、集会から新しく出す雑誌のためにどういう雑誌名にしたら良いか、いろいろな兄弟たちと話し合っていました。そしてこの「主は生きておられる」が一番良いのではないかと思ったのです。その雑誌は『主は生きておられる』という誌名になりました。『みことばの扉』を贈ってくださったあの姉妹は、説明として証しされていました。「娘が自殺したとき、私はこのみことばの事実を体験しました。主は生きておられる」と。

どのような悩み苦しみがあっても、「主は生きておられる」と考えるとき、嬉しくなりますね。

二千年前の今週は、イエス様にとって一番辛い時だったでしょう。その2日前の日曜日、イエス様はユダヤ人の王として公に受け入れられるようになり、大歓迎を受けられました。(エルサレム入場)「王様。万歳！」と国民は叫んだのです。しかしその2、3日後の金曜日、この群衆は次のように叫んだのです。「十字架につけろ…」と。イエス様は如何に悩まれ、苦しまれたか、私たちには想像できません。けれどイエス様はご自身が「復活される」ことをご存じでしたから、私たち人間一人一人の永遠の幸せのためなら、ご自分は無視されても、捨てられてもかまわない、という態度をとられたのです。

ロシアでは、「ロシア革命」(1917年)以前、考えられないほど多くの人々が、イエス様を信じていました。どこにでも教会があり、人々は喜んで集ったのです。復活祭がどの

ようにお祝いされたかと言いますと、「イエス様のよみがえり」を讃える教会の鐘が一週間、町々に響き渡り、喜びに胸をはずませて主を賛美し、人々は町で会うと互いに、「こんにちは」ではなくて、「主はよみがえられた！」と挨拶したのです。応えとして、返事として、「まことに主はよみがえられた！」と、そういう挨拶でした。しかもいつも床にひざまづいて祈る習慣のあるロシアのイエス様を信じる人たちは、「主のよみがえり」の喜びのあまり、その40日後の昇天記念日まで、40日間も立ったまま祈った、ということです。

また、この「よみがえり」から昇天までの40日間、誰かが死ぬと、墓の周りでは普通の賛美歌は歌いませんでした。「死に打ち勝たれたイエス様」を讃えるよみがえりの歌だけが歌われたのです。そしてもう一つ、非常に面白い習慣があったそうです。それは復活祭の礼拝には、礼拝の最中に一同大笑いしたそうです。大きな声で、みんなで笑ったということです。結局、「復活の喜び」を讃えたということです。イエス様は私たちの罪と咎を負い、死と悪魔に打ち勝たれました。「悪魔は私たちに対して何の権利もない」と悪魔をあざ笑う笑い声を、礼拝の最中に声高くあげたということなのです。

私たちも上を見上げて望みを抱き、悪魔に打ち勝ちよみがえられたイエス様とともに、天に座を占められたイエス様への喜びを新たに、悪魔を大声であざ笑うことが許されています。イエス様は勝利者になるのではなく、既になられたのです。当時としては目に見える限りにおいて、確かに支配者は悪魔ではなかったでしょう。しかし、私たちが生きている今の時代においては、世界の支配者は悪魔です。ですからこのような大混乱が起きています。しかし「世界」は、イエス様に与えられているものです。イエス様は何をなしてくださるのか、どういうことになるのかも、もちろんご自身はご存じです。悪魔さえも、イエス様の目的が達せられるために用いられる召使のような者に過ぎません。ですから、イエス様は「完了した」と叫ばれたのです。

コリントにいる兄弟姉妹は、確かに模範的なキリスト者ではなかったのです。パウロは彼らに書きました。

コリント人への手紙・第二 5章15節

「キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。」

と。

イエス様は私たちの罪の問題を解決するために死なれたというよりも、私たちがこの主に、より頼む者となり、用いられる器となるためです。使徒たちはそのためにいろいろな手紙を書きました。新約聖書の手紙は、当時の問題に対する答えに過ぎなかったのです。

さて今日もう一度、テサロニケ第一の手紙について考えたいと思います。先日、私たちは次のことについて考えてきました。すなわち、「夜の者」と「光の子」についてでした。

- ・私たちは、いったい「光の子」なののでしょうか。それとも「夜の者」なののでしょうか。
- ・「眠っている者」なののでしょうか。「目を覚ましている者」なののでしょうか。
- ・「望みのない者」、或いは「生き生きとした望みを持っている者」なののでしょうか。
- ・「不安に満ちた者」なののでしょうか。「喜びに満たされている者」なののでしょうか。
- ・「全く無防備な者」なののでしょうか。「よく装備した者」なののでしょうか。

- 主の目からご覧になると、人間は二つの種類に区別することができます。つまり、
- ・「信じる者」か、「悔い改めたくない者」か。
 - ・「霊的に生きている者」か、「死んでいる者」か。
 - ・「主なる神の御子であるイエス様の者」か、「悪魔に支配されている者」か。
 - ・「既に今、永遠のいのちを持っている者」か、「永遠の滅びに向かって進んでいる者」か。

まだ救われていない人、永遠のいのちを持っていない人は、「本当の希望」がありません。そして、そのような人が今日ここにもいるかもしれません。イエス様は今日、「わたしに何を望んでいるのですか」と私たちに向かって尋ねておられます。私たちは、「絶えざる喜びと、永遠のいのち、そしてまた罪の赦しを得たいのです」と、そのように告白しようとは思いませんか。人間ひとりひとりのために死んでくださり、既に人間ひとりひとりのために救いの代価を支払ってくださったイエス様が、呼びかけておられます。

イザヤ書 44章22節

「わたしは、あなたのそむきの罪を雲のように、あなたの罪をかすみのようにぬぐい去った。わたしに帰れ。わたしは、あなたを贖ったからだ。」

すばらしいみことばです。イザヤ書は、旧約聖書の福音書と呼ばれています。

マタイの福音書 9章2節

すると、人々が中風の人を床に寝かせたまま、みもとに運んで来た。イエスは彼らの信仰を見て、中風の人に、「子よ。しっかりしなさい。あなたの罪は赦された。」と言われた。

イエス様が私たちに成してくださった大いなるみわざに対して、感謝したいと思いませんか。イエス様は、今日誰でもみな、「光の子」としたいと思っておられます。イエス様の証しとは、

ヨハネの福音書 8章12節

イエスはまた彼らに語って言われた。「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」

今日は、テサロニケ第一の手紙の5章後半について、一緒に考えたいと思います。即ち

12節から28節には、光の子が「永遠のいのち」つまり「全く新しいいのち」を持っており、また新しい生活に導かれる恵みも持っていることが記されています。そのテーマ、主題をつけようとするれば、『聖書的な教会生活』といったら誤解されるかもしれませんが…。『信仰生活』にしましょうか。その際この箇所を次の四つに分けて考えることが、便宜上許されると思います。

テサロニケ人への手紙・第一 5章12節

兄弟たちよ。あなたがたにお願いします。あなたがたの間で労苦し、主にあってあなたがたを指導し、訓戒している人々を認めなさい。

この中で12回、「お願いします」「お願いします」と書いてあるのです。

テサロニケ人への手紙・第一 5章13節から28節

その務めのゆえに、愛をもって深い尊敬を払いなさい。お互いの間に平和を保ちなさい。兄弟たち。あなたがたに勧告します。気ままな者を戒め、小心な者を励まし、弱い者を助け、すべての人に対して寛容でありなさい。だれも悪をもって悪に報いないように気をつけ、お互いの間で、またすべての人に対して、いつも善を行なうよう務めなさい。いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。御霊を消してはなりません。預言をないがしろにははいけません。すべてのことを見分けて、ほんとうに良いものを堅く守りなさい。悪はどんな悪でも避けなさい。平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエス・キリストの来臨のとき、責められるところのないように、あなたがたの霊、たましい、からだを完全に守られますように。あなたがたを召された方は真実ですから、きっとそのことをしてくださいます。兄弟たち。私たちのためにも祈ってください。すべての兄弟たちに、聖なる口づけをもってあいさつをなさい。この手紙がすべての兄弟たちに読まれるように、主によって命じます。私たちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたとともにありますように。

主題、またテーマは、『共なる生活』とつけることができるのではないかと思います。

四つに分けられると思います。

第一番目。健全な教会のとりべき態度。

第二番目。健全な教会の特徴。

第三番目。健全な教会の奥義。

第四番目。健全な教会のかしら。

*まず第一に、健全な教会のとりべき態度とは、どういうものでしょうか。長老たちに対して。また他の兄弟姉妹に対して。

ご存じのように、牧師ということばは新約聖書の中に一度だけ出てきます。それ以外は

長老ということばが何度も何度も使われています。しかもその長老は単数ではなく、いつも必ず複数のかたちで使われています。もちろん信者は誰でも他の人に対して責任を持っており、お互いの交わりを通して成長すべきですが、特に集会全体の動きに注意し、すべての行ないに対して責任をとるのが、まず長老たちの仕事です。

大部分のいわゆるキリスト教会で行なわれているのは、万人祭司制ではなく、「牧師制度」です。今朝もある二人の方と話しました。兄弟の方は四年間神学校に行って卒業しましたが、「教会の牧師になりたくない。もとの高校教師に戻りたい」と。

日本のために宣教師、或いは牧師は必要ないのです。働きながらイエス様を紹介する人々こそ要求されています。

昔、田舎で開拓伝導したとき、大洗、那珂湊に二つの教会が誕生しました。いろいろな人が導かれ、その中の十一人が神学校に行って牧師になったのです。しかし、私は彼らに勧めたのです。「職業をもちなさい」と。働きながら証ししたほうが良いと考えたからです。しかし残念なことに、その考えは実現しませんでした。そこで東京に吉祥寺集会が始まったとき改めて決心したのです。「神学校に行こうと思う人がいても私は反対します。やはり集会の中で祈りながら、苦しみながら、主を仰ぎ見るなら、ずっと効果的なのではないかと思います」と。

初代教会の中に牧師はいなかったのです。牧師は、本当はひとりしかいません。それは「イエス様」なのです。人間が牧師だと言うのはちょっとおかしいですが、人間はみんな迷える羊です。（たとえ神学校を出ても。）やはり「本当の牧師なるイエス様」の導きが必要ならば、無理でしょう。

ヤコブの手紙 3章1節

私の兄弟たち。多くの者が教師になってはいけません。ご承知のように、私たち教師は、格別きびしいさばきを受けるのです。

奉仕をする者は大きな責任を持っていると記されています。「格別きびしいさばきを受ける」と。

へブル書にも次のように書かれています。

へブル人への手紙 13章17節

あなたがたの指導者たちの言うことを聞き、また服従しなさい。この人々は神に弁明する者であって、あなたがたのたましいのために見張りをしているのです。ですから、この人たちが喜んでそのことをし、嘆いてすることにならないようにしなさい。そうでないと、あなたがたの益にならないからです。

と。

いわゆる長老たちは、非常に現実に即した方法で集会における調和をはかっていくのです。長老たちは、主を信じる心の熱い人たちであり、生涯主イエス様を第一としている人

たちであり、イエス様の恵みが自然とあふれ出ている人たちであるときに、そこには健全な教会、霊的な集会が見られるものと期待してよいでしょう。

その反面、長老たちがこの世の問題に没頭して、うわべの興味に心奪われ、みことばを読み、祈る時間がないほど忙しいようなところには、その群れの中に冷ややかな空気や、死んだような空気が漂っているものと思って間違いないでしょう。

また長老たちは、責め、戒め、勧めなければなりません。

テモテへの手紙・第二 4章2節

みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。

と、パウロは愛弟子であるテモテに書いたのです。

テトスへの手紙 1章13節

この証言はほんとうなのです。ですから、きびしく戒めて、人々の信仰を健全にし、
...

と記されています。

テトスへの手紙 2章15節

あなたは、これらのことを十分な権威をもって話し、勧め、また、責めなさい。だれにも軽んじられてはいけません。

と書かれています。

信仰にもとる（背く）ことは何ごとであれ、全き権威をもって戒めなければなりません。健全な教えに留まっていようとしない人たちには、激しく責めて勧めなければなりません。

長老たちは信仰厚き心を持って主張しなければならないのです。このようにイエス様を第一とし、教会を導く長老たちは、重んじられ敬われるべきであるとあります。

次に、他の兄弟姉妹たちに対する態度について考えましょう。ここでパウロは、三種類の信者たち、即ち怠惰な者、小心な者、弱い者について語っています。そしてこのような者に対する態度についても述べています。

・まず、怠惰な者を戒めなさいとあります。ここで怠惰な者とは、原語によると、ただ怠け者という意味だけでなく、自分勝手な道を行こうとする者、或いは秩序を乱す者という意味をも含んでいます。（そのような信者はどこの教会にもいるものです。）そしてこのような者は自分自身を損なうだけでなく、集会全体の秩序を乱すため厳しく戒められなければなりません。

・次に、小心な者は私たちの助けを必要としています。自分自身の内側を見たり、周囲を見たりしている小心な者は、常に何らかの不安と心配とを持っているのです。彼らは信仰

に対する勇気をもつ必要があります。そのため私たちは小心な者を励まし力づけなければなりません。

・最後に、弱い者について語られています。彼らは、単に体が弱いというだけではなく、集会の中でたくましい信仰生活を貫き通すことができない人たちです。しかし私たちは、このような弱い者をなおざりにすることは許されません。なぜなら、彼らは助けを必要とする者であり、強い者に担われ、支えられなければならない人たちであるからです。

要するにいかなることがあっても、人々に対する怒りをしずめ、いろいろな決定や過ちにも関わらず彼らと交わろうとする心がけを持つことが必要です。集会の中でいろいろな罪や悪い行ないを続けるような人がいる場合は、集会全体の秩序と聖さを保つためにそのような人から離れなければならない、とパウロは書いたのです。

*第二番目。健全な教会の特徴について、少し考えたいと思います。

三つのこと、奪われない喜び。絶えざる喜び。すべてに感謝することです。

テサロニケ人への手紙・第一 5章16節から18節

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。
これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。

・まず、「誰からも奪われることのない喜びがある」ということです。

イエス様はただ私たちのために死んでくださっただけでなく、今もなお私たちとの交わりを提供してくださっているのです。私たちは損なわれることのない喜びを与えられているのです。私たちの喜びは私たち自身の中にあるのではなく、また私たちが持っているものや周囲の中にあるのでもありません。「ただイエス様ご自身の中にある」のです。イエス様に結びついていることが許されているということこそ、本当の喜びを意味しているのではないのでしょうか。すべての他の喜びは過ぎゆくものであり、永遠に続くものではありません。

・17節の「絶えず祈りなさい」。これは第二の特徴です。

イエス様のご臨在を意識することが、私たちの重要な関心事になっているのでしょうか。絶えず祈るということは、自分勝手な行ないをせずに、絶えず主により頼むということの意味しているのです。健全な信者の特徴はイエス様により頼むことです。絶えず祈ること、絶えず礼拝することは、兄弟姉妹にとって義務ではなく、大いなる特権です。自分自身の力で行なおうとする人は「私は祈らなくてはならない」と言いますが、イエス様を喜んでいる者、自分の本当の惨めさ、力なさをわかっている者は、「私は祈ることを許されている」と言うのです。

・健全な教会の特徴とは、「変わらない喜び」「絶えざる祈り」もう一つ、「すべての事について感謝する」ことです。

すべての事に感謝することが、健全な集会の特徴です。すべての事を通して理解することができなくても、イエス様をよりよく知ることができるのです。そしてイエス様をよりよく知ることこそ最も価値のあることなので、私たちはいつでもすべての事について感謝することができるのです。

「いつも喜んでいること」「絶えず祈ること」「すべての事について感謝すること」、これは、主の提案ではなく、命令です。私たちが感謝するかしないか、祈るか祈らないか、絶えず喜んでいるかいないかは、私たちにとってどうでも良いことではありません。イエス様のご命令に従わないことは罪である、と聖書は語っています。それほどことは重大なのです。

いったい私たちの集会の特徴はどうでしょうか。

今まで二つの点について考えてきました。

第一番目。健全なる教会のとるべき態度

第二番目。健全なる教会の特徴。

*第三番目。健全なる教会の奥義とは、どのようなものでしょうか。

ここでも三つのことが述べられています。

1. 御霊が消されていないこと。
2. 預言が軽んじられていないこと。
3. すべてのものを識別すること。

テサロニケ人への手紙・第一 5章19節から22節

御霊を消してはなりません。預言をないがしろにしてはいけません。すべてのことを見分けて、ほんとうに良いものを堅く守りなさい。悪はどんな悪でも避けなさい。

と記されています。

ここで語られているのは、御霊が消されていないこと、預言が軽んじられていないこと、すべてのものを識別して良いものを守ることです。私たちは御霊に対してどのような態度をとるのでしょうか。

御霊は、信じる者の中に宿り、信じる者を通して主のご栄光を現わしたく思っておられます。主に支配権を明け渡さず、御霊の導きにも従わないことは、御霊を消すことを意味します。

次に、預言が軽んじられていないことは、健全な教会の特徴です。もちろん預言とは、主のみことばを意味しています。ですからいつ如何なるところにおいても、「主なる神は何と言っておられるか」と注意することは非常に大切です。初めに読んでいただきましたコリント第一15章の中に二度も、「聖書の示すとおり」、「聖書に従って」とあります。

パウロも、ローマ書4章3節に書いたのです。「聖書は何と言っていますか」と。大切なことはそれなのです。人間が何を考えているか、どのように判断するのかは、関係ありません。ですから、集会の出す本そのものは、立派なものではありません。良いのは、「引用されている聖書のみことば」。これは100%OKです。他は価値のあるものではありません。言いたいことは、「聖書は何と言っているか」です。

いつもこれを考えると、気持ちが非常に楽になります。自分で考えなくても良いからです。「聖書は何と言っているか」。つまり、聖書は「神のみことば」ですから。

パウロは、
ローマ人への手紙 4章3節

聖書は何と言っていますか。「それでアブラハムは神を信じた。それが彼の義と見なされた。」とあります。

と。ただし、一方的な考え方から主のみことばを厳しい命令のように怖れることでなく、自分の花婿であられる「イエス様がいったい何を望んでおられるのか」知りたい、という気持ちをもって耳を傾けることが要求されています。イエス様は、私たちが完全に主のものとなるために私たちを買い取ってくださいました。イエス様は、私たちと語らうこと、交わりをもつことを望んでおられます。ですから、主を知って自由に語っていただくということが、信じる者にとって非常に大切なことです。

第三に、すべてのものを識別することが要求されています。盲従はしばしば誤りに繋がります。吟味せずに従うことは誤っている、と聖書は言っています。そして、盲従を要求する者は御霊とは違ったものによって動かされているのです。例えば、昔のドイツのアドルフ・ヒットラーが盲従を要求し、統一教会の文鮮明も同じことを要求しているのです。盲従する者は主イエス様を拒むということです。私たちは各々自分の識別と納得によって、自由意志で主に従うべきです。私たちはあることが「みことばに基づいているかいないか」を、まず識別しなければなりません。みことばに基づいていなければそれから離れるべきであり、みことばに基づいていればそれに従うべきです。したがって順序としては、まず初めに識別、それから信仰、そして最後に従順となるわけです。私たちはみことばによって或ることを識別したならば、その意味がわからなくても従うべきです。

以上、三つの点について考えました。

最後に短く、健全な教会の「かしら」について、考えたいと思います。

「かしらなる」のは、もちろんイエス様です。イエス様とはどのようなお方でしょうか。完全に清めてくださるお方です。また、再び来られるお方です。それから保証人となられるお方である、とここで書かれています。

第一に、「かしらなるイエス様」ご自身が、私たちを全く清めてくださるお方なのです。

(自分で出来ないから。)

第二に、「かしらなるイエス様」の來臨こそが、私たちの望みそのものです。

第三に、私たちが目標を達成することに対する保証が、「かしらなるイエス様」にあるのです。

これらのことについて、パウロは書いたのです。

テサロニケ人への手紙・第一 5章23節

平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエス・キリストの來臨のとき、責められるところのないように、あなたがたの霊、たましい、からだを完全に守られますように。

と。パウロの確信とは、そういうものでした。パウロは、テサロニケの集會をことごとくイエス様に委ねました。というのは、人間には不可能のように思われることも、主はお出来になるからです。エペソ書から一箇所読んでみましょう。

エペソ人への手紙 5章25節から27節

夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。

第一に、イエス様は教会を愛し、清めて聖なるものとするためにご自身をささげられたのです。ただ罪の問題を解決するためだけではありません。私たちが救われたのは、単に罪の赦しを得るためではありません。全く聖なるものとなるためだとパウロはここに書いたのです。

自分自身の光によってこの目的を達成することは全く不可能です。しかし、イエス様ご自身が、なさろうと思うことを完成してくださるのです。主のきよめとは、表面的なことではなく霊と心とからだすべてを含んでいます。

第二に、きよめの目的はイエス様ご自身が再び来られるからです。イエス様が来られるとき、私たちはすばらしい婚礼に臨む祝福にあずかることができるのです。花嫁が一番汚い結婚衣装を探して着ようとはしません。むしろ反対に一番きれいな衣装を着たいと思うのです。イエス様の花嫁として招かれている私たちも、いろいろな苦難や患難を通して、初めて十分な備えが出来るようになるのです。そしてまさにそのとき、イエス様は再び来

られます。

最後に、目標を達成することの保証人がイエス様ご自身です。

テサロニケ人への手紙・第一 5章24節

あなたがたを召された方は真実ですから、きっとそのことをして下さいます。

私たち自分の力や努力によるのではなく、イエス様が成そうと思われる故にそのことが成就されるのです。イエス様は真実であられるので、私たちは完全にイエス様に信頼することが出来るのです。イエス様は私たちを忌まわしい過去から救い出してくださり、あらゆる罪を消し去って下さいました。イエス様は現在も私たちの主であられ、私たちを助け導き、また聖めて下さいます。そして主イエス様こそ、私たちの将来における「生きた望み」です。

テサロニケの人々への手紙・第一 5章25節から28節

兄弟たち。私たちのためにも祈ってください。すべての兄弟たちに、聖なる口づけをもってあいさつをなさい。この手紙がすべての兄弟たちに読まれるように、主によって命じます。私たちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたとともにありますように。

この25節から28節において、パウロは挨拶を書き送っています。このことから、初代教会の特徴がまごころのこもった本当の愛であったことがわかります。しかもパウロは、単に長老たちやごく一部の兄弟姉妹だけではなく、すべての兄弟姉妹に挨拶を送り、手紙を読み聞かせるように言っているのです。教会はいろいろな集団、例えば、霊的に大人の信者と子どもの信者であるとかいうように分けることは決して良くない、と言っているのです。教会は一つの統一をもったものであり、パウロはすべての兄弟姉妹を心から愛したのです。そして主のみこころが現われることをすべての兄弟姉妹が知るからこそ、パウロの関心事そのものだったのです。

了